奈良県十津川村における小学校社会科副読本の分析

大辻彩音
（奈良教育大学 社会科教育専修）
河本大地
（奈良教育大学 社会科教育講座（地理学））

Analysis of Special Textbook of Local Study for Social Studies in Elementary Schools in Totsukawa Village, Nara Prefecture

Ayane OTSUJI
(Social Studies Education Specialization, Nara University of Education)
Daichi KOHMOTO
(Department of Geography, Nara University of Education)

要旨：学校統廃合により学校区が広域化した十津川村の地域学習がどのように変化していったのかを、副読本の分析をもとに明らかにする。大きな変化は、説明文を中心とした読み物教材の形から、インタビュー内容の掲載や、子どもたちに自分たちで調べる、やってみることを促す記述の増えた教科書準拠型になったことである。また、内容の変化としては、歴史についての記述が減り、暮らしに関することや環境・災害に関する記述が増えた。さらに、学校統合前後でも、副読本の内容の変化が見られた。

キーワード：地域副読本　special textbook of local study
小学校社会　Social Studies at elementary school
地域学習　local study
地理教育　geographical education

1．はじめに

1．1．研究の背景

副読本は、一般的に市区町村の教育委員会や社会科教育研究会によって編集・発行されるものであると定義されており、主に小学校中学年の社会科で身近な地域を学習するときの主たる教材となっている。学校教育法第 34 条「前項の教科用図書以外の図書その他の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる。」と示されており、副読本はこの、「教科用図書以外の図書」で、有益適切なものを意味する（筒井 2017）。教科書では全国各地の教材を扱うため、子どもたちにとっては見知らぬ地域を学習することになってしまう。そのため、それぞれの地域に根ざした教材で、子どもたちが主体的に学べるように副読本が活用されている（大藪 2008）。

副読本についての研究は古くから行われている。伊藤（2008）によると、従来の社会科副読本に関する研究や実践を検討しており、1940 年代から、郷土資料や郷土読本などの社会科副読本の前身となる教材が発行・活用され、研究も行われていた。その後、学習指導要領の改訂に沿って副読本の形態にも変化が現れる。1960 年代から 1970 年代の間に郷土学習という概念から地域学習という概念への転換が起こり、郷土読本から社会科副読本への移行が進んだ。平成に入ると、副読本の中身が教科書準拠型、授業過程再現方式、地域準拠型副教科書などと様々な変化が起こった。このことと関連して、池（2008）では、副読本と教科書の役割分担に関する問題点や、市町村合併により身近な地域が広域化していることに伴う問題点について考察するために、静岡県の小学校で使用されている副読本を分析し、副読本の内容構成や記述スタイルを詳細に分類している。このように、平成の大合併後にできた副読本の課題についての研究は多くなされてきた。

しかし、地域学習をするうえでの身近な地域の広範化は、市町村合併にとどまらない。佐藤（2014）では青森県鰺ヶ沢町の小中学校の事例を取り上げ、2011 年に小学校が 9 校から 2 校へ、中学校が 2 校から 1 校へと統合されたことにより、2000 年から小中学校と地域が連携して展開されてきた「ふるさと教育」が、広範化した学区域においては地域連携の機会の減少が懸念されるとした。さらに、板橋・岩本・河本（2018）は、へき地における学校統廃合の問題点を指摘し、その中に統廃合実施前の学校区に関する地域学習の機会の減少・喪失を挙げている。

このように学校統廃合においても身近な地域の広範化

の問題が起こっていると言える。そのため、本稿では市町村合併は行われていないが、日本一の面積を誇る村であり、少子高齢化の影響もあり学校統廃合が進んで、現在村内にある小学校が２校にまで減ってしまった十津川村に注目する。そして、学校統廃合により学校区が広範になったことにより、十津川村の地域学習がどのように変化していったのかを､副読本の分析をもとに明らかにする。

１．２．研究方法

十津川村の小学校で使用されていた 1972 年度版、1981 年度版、1992 年度版の副読本と、現在も使用されている 2015 年度版の副読本の内容の分析を行った。
分析の詳しい方法は３章で述べる。

２．対象地域

研究の対象は、奈良県十津川村（図１）にある十津川村立十津川第一小学校と十津川村立十津川第二小学校である。

十津川村は奈良県南部に位置し、面積は 627.38㎢で、奈良県全体の面積の約五分の一を占める。村としては日本で最も大きい。55 の大字がある。

主な産業は林業・観光業・土木建設業が挙げられる。林業については、十津川村の面積の約 96％が森林になっており、古くから営まれてきた。近年では山から木を伐り出し搬出する、第一次産業と、製材･加工などを行い、家具などの製品を作り出す第二次産業、製品を PR したり販売したりする第三次産業をすべて十津川村で行う、第六次産業化に取り組んでいる。また、観光業として、十津川温泉郷が挙げられる。日本で初めて「源泉かけ流し宣言」をした村として、温泉地温泉、十津川温泉、上湯温泉のそれぞれ泉質の違う三つの温泉がある。

人口は 2020 年 4 月 1 日時点で 3,166 人である。2018 年 4 月 1 日時点の年齢階層別の人口を見ると、男性で 60 ～ 64 歳、女性では 80 ～ 84 歳の人口層が最も多く、高齢化が進んでいる。

十津川村立十津川第一小学校（図２）は、村役場や警察署、診療所、歴史民俗資料館等がある、村のほぼ中央の大字小原に位置する。2010 年 4 月に、上野地小学校･二村小学校・三村小学校の三校を統合し、三村小学校の跡地に開校された。校区は、旧上野地小学校区である中野村区、神納川区と、旧二村小学校区である、二村区、旧三村小学校区の三村区、東区の一部になり、村のおよそ三分の二を占めるため、ほとんどの児童がスクールバスに乗って登校している。児童数は 2020 年現在で 37 名である。東区の中の大字竹筒は、和歌山県新宮市にある新宮市立熊野川小学校の学区となっているため、校区には含まれていない（図１）。

学校の特色として､全校児童を４つの縦割り班に分け、全校活動や班遊びを行うことで、児童の自主性やコミュニケーション力を育む縦割り班活動や、統合前の旧学校のそれぞれの特徴を引き継ぎ、わらべうたや和太鼓、一輪車などの活動を取り入れている。

十津川村立十津川第二小学校（図３）は、55 の大字のうちもっとも人口の多い平谷に位置する。2017 年 4 月 1 日に、平谷小学校・西川第一小学校・西川第二小学校の三校を統合し、開校された。十津川村立みどり保育所が併設されている。校区は旧西川第一小学校や旧西川第二小学校の校区である、西川区と、旧平谷小学校区の四村区と東区の一部の折立と山手谷を含む範囲である(図１)。児童数は 2020 年現在で 62 名である。

学校の特色として、毎日５時間目が始まる前の 10 分間に実施される「読書タイム」や、学期に一回、一週間、保護者や地域の人々に普段の学校を見学してもらう､「学校開放ウィーク」などがある。

図１　十津川村全域の地図と学校所在地
（1997 年時点に存在した小学校も含む）

図２ 十津川村立十津川第一小学校 外観
（2020 年 8 月 27 日、河本撮影。）

図 3 十津川村立十津川第二小学校 外観
（2020 年 8 月 25 日、大辻撮影。）

3．副読本に見る十津川村の地域学習の変化

十津川村で使われている副読本は、十津川村の教育委員会と、十津川村の小学校・中学校の教員により編集・執筆されている。

1972 年度に初版が発行され、その後、1981 年度に第二版、1992 年度に第三版、そして 2015 年度に第四版が発行され、第四版が現在も使用されている。第三版の 1992 年度版と、第四版の 2015 年度版の間に、上野地小学校、二村小学校、三村小学校の三校が廃校となり、十津川第一小学校への統合が行われている。

このように、身近な地域について学ぶための教材である副読本の内容に着目し、十津川村で行われてきた地域学習がどのように変化していったのかを分析する。分析方法としては、平田（2007）の分析を参考に、地形、政治、経済産業、社会、生活文化、交通、環境・災害、歴史の 8 項目をつくり、副読本の目次の見出しごとに 8 項目にあてはまる内容があれば 1 としてカウントし、どの項目が多く扱われているのかを分析した。この分析を十津川村で使われていた、1972 年度版（昭和 47 年度版）、1981 年度版（昭和 56 年度版）、1992 年度版（平成 4 年度版）、2015 年度版（平成 27 年度版）のそれぞれで行い、年度ごとの違いや変化を見ていく。分類の基準については表 1 にしるす。また、副読本の中の資料にも着目し、地図、グラフ、表、写真、作文･インタビュー、図の 6 項目に分類し、資料の使われ方についても分析した。

表 1　副読本の内容の分類基準

	分類基準
地形	山や川の位置関係についての記述
政治	行政のはたらきや近隣の市や県との関係についての記述
経済産業	農業・工業・商業に関する記述
社会	警察・消防・学校・公民館・図書館・児童館などの公共施設についての記述
生活文化	人々の生活の特徴についての記述
交通	道路や交通機関についての記述
環境・災害	自然環境や災害についての記述
歴史	村・学校・人々の生活の歴史に関する記述

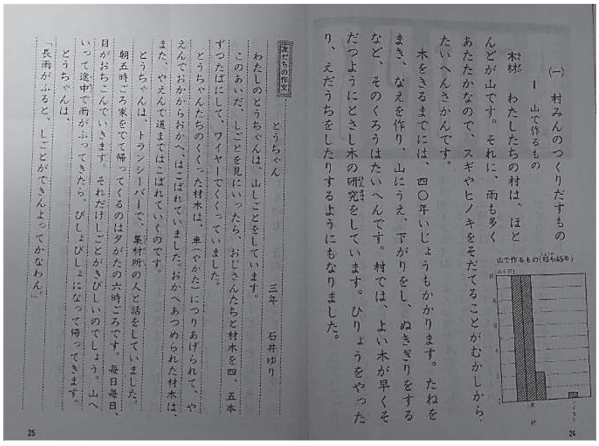
以下に各年度の特徴からわかる、社会科における地域学習の変化を述べる。

副読本は基本的に学習指導要領の改訂に伴い、改訂されている。

1972 年度版では、内容の説明文を中心とした読み物教材の形であった。学習指導要領の改訂に合わせて 1981 年度に副読本の改訂も行われたが、内容についてはほとんど変わらず、読み物教材の形は変わらなかった。しかし、ページ数が 60 ページ以上増え、「ちがった土地のくらし」という項目が新たにつくられた。また、方角や地図記号、気候についての説明が加わったり、3 年生で扱う内容と、4 年生で扱う内容を分けるようになったりと、少し教科書準拠を意識した形に変化している。

大きな変化は 1992 年度版の改訂の際にあった。今までの説明文中心の形から、学習内容や単元の並びを教科書に沿って作られる教科書準拠型になった。このことは、1992 年度版の副読本の中のあとがきに、1992 年の小学校学習指導要領の全面改訂に伴い、「教科書の単元構成に準拠したこと」が改訂における留意事項として述べられていることからもわかる。副読本の本文が縦書きから横書きに変化し、説明文から副読本の中に登場する児童が調べたことや、「○○さんの話」というようにインタビューの内容が本文の中心になった。調べものをするときの注意点や「みなさんも調べてみましょう」といった文章が書かれており、児童の活動を促す記述も増えた。

2015 年度版では、1992 年度版から 20 年以上が経過したため、どちらか一つを学ぶ選択教材が含まれるなど



(一)　村みんのつくりだすもの

Ⅰ　山で作るもの

村が　わたしたちの村は、ほとんどが山です。それに、雨も多くあたたかなので、スギやヒノキをそだてることがむかしから、たいへんさかんです。

木をきるまでには、四〇年いじょうもかかります。たねをまき、なえを作り、山にうえ、下がりをし、ぬきぎりをするなど、そのくろうはたいへんです。村では、よい木が早くそだつようにとさし木の研究をしています。ひりょうをやったり、えだうちをしたりするようにもなりました。

山で作るもの（ちがった土地のくらし）

海だちの作文

どうちゃん　三年　石井ゆり

わたしのどうちゃんは、山しごとをしています。

このあいだ、しごとを見にいったら、おじいさんたちと材木を四、五本ずつたばにして、ワイヤーでくくっていました。

どうちゃんたちのくくった材木は、車「やかた」につりあげられて、えんでおかからおかへはこばれていました。おかへあつめられた材木は、また、やえんで運まではこばれていくのです。

どうちゃんは、「トランシーバー」で、集材所の人と話をしていました。

朝、五時ごろ家をでて帰ってくるのは夕がたの六時ごろです。毎日毎日、目がおちこんでいます。それだけしごとがきびしいのでしょう。山へいって途中で雨がふってきたら、びしょびしょになって帰ってきます。

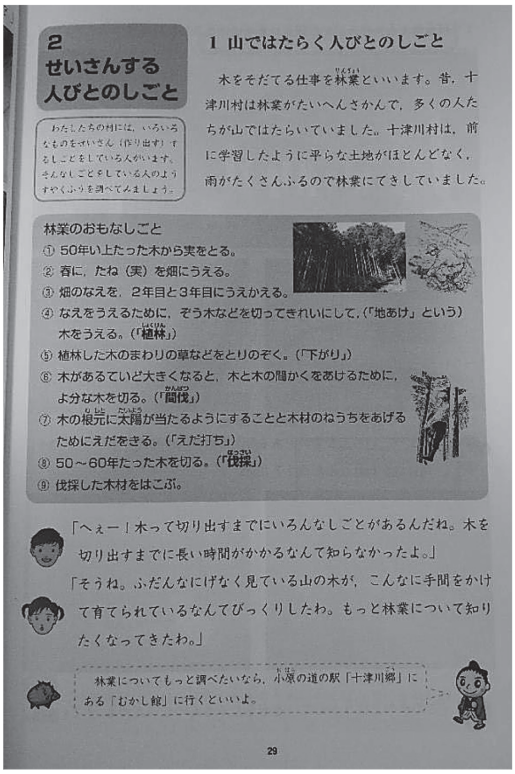
どうちゃんは、

「雨がふると、しごとができんよってかなわん」

25　26

図 4 1972 年度版の副読本（p24. 25）

より教科書に準拠した形になっている。また、村内の施設を紹介する資料をはさんで、3 年生と 4 年生で扱う内容を分けていることもわかる。



2
せいさんする
人びとのしごと

わたしたちの村には、いろいろなものをせいさん（作り出す）するしごとをしている人がいます。そんなしごとをしている人のようすやくふうを調べてみましょう。

1 山ではたらく人びとのしごと

木をそだてる仕事を林業といいます。昔，十津川村は林業がたいへんさかんで，多くの人たちが山ではたらいていました。十津川村は，前に学習したように平らな土地がほとんどなく，雨がたくさんふるので林業にてきしていました。

林業のおもなしごと
① 50年い上たった木から実をとる。
② 春に，たね（実）を畑にうえる。
③ 畑のなえを，2年目と3年目にうえかえる。
④ なえをうえるために，ぞう木などを切ってきれいにして，（「地あけ」という）木をうえる。（「植林」）
⑤ 植林した木のまわりの草などをとりのぞく。（「下がり」）
⑥ 木があるていど大きくなると，木と木の間かくをあけるために，よ分な木を切る。（「間伐」）
⑦ 木の根元に太陽が当たるようにすることと木材のねうちをあげるためにえだをきる。（「えだ打ち」）
⑧ 50～60年たった木を切る。（「伐採」）
⑨ 伐採した木材をはこぶ。

「へぇー！木って切り出すまでにいろんなしごとがあるんだね。木を切り出すまでに長い時間がかかるなんて知らなかったよ。」
「そうね。ふだんなにげなく見ている山の木が，こんなに手間をかけて育てられているなんてびっくりしたわ。もっと林業について知りたくなってきたわ。」

林業についてもっと調べたいなら，小原の道の駅「十津川郷」にある「むかし館」に行くといいよ。

29

図 5　2015 年度版の副読本（p.29）

内容の変化は、社会、環境・災害に関する内容の扱いが増え、歴史に関する内容の扱いが減った。1972 年度版と 2015 年度版を比べると、社会が約 16%、環境・災害が約 20% 増え、歴史が、約 15% 減った。

1972 年度の「はじめに」には、社会科の三年生では、「人びとが力をあわせながら、その土地にあったくらしをしているすがたを知ること。」「くらしのうつりかわりを知ること。」「すすんでくらしをよくしようと考えること。」などが主な勉強であると述べられている。その後の 1981 年度版は、本文の内容は 1972 年度版とほとんど変わっていないことや、1992 年度の「はじめに」でも、1972 年度版の「はじめに」の記述から引用し、その考えは今も変わらないことを示していることなどから、基本的にこの三つの要素は引き継がれていると考えられる。

その中でも、1972 年度や 1981 年度の副読本には「村のうつりかわり」というところに焦点を当てて作られている。1970 年代から 1980 年代には十津川村の中で、新たに公共施設ができたり、道路ができて交通の便がよくなったりといったように、村のなかの暮らしがかわっていった時期であったため、村の発展や村でのくらしがよくなっていく様子を中心とした内容になっているのだと考えられる。

一方、1992 年度版からは「人びとが力をあわせながら、その土地にあったくらしをしているすがたを知ること。」や「すすんでくらしをよくしようと考えること。」に焦点があてられるようになった。特に 2015 年度版では、2008 年に改訂された学習指導要領の中に「生きる力」を育むことが重視されたことから、十津川村についての知識を学ぶだけではなく、課題を知り、自分たちにできることを考えさせることを促す問いかけや資料提示の工夫が見られる。具体的には「住みよいくらし」をつくるという内容のところで、ごみ処理や水について学び、ごみを減らす工夫などの環境に配慮するためにはどうすればよいかを最後に問いかけ、「安全なくらしを守る」という内容のところでは、災害や事故が起こった時にどのような人々がどのような働きをしているのかを学び、自分たちにできることを考えさせる構成になっている。特に、十津川村では 2011 年の紀伊半島大水害で大きな被害を受けたことから、副読本の中でもこのことを取り上げている。その後、災害が起きたときに自分たちができることを考えさせる構成となっており、児童の身近なところに引き寄せて考えさせる工夫がされている

このことから、十津川村でのくらしをよくしてくれている人々の働きを知り、自分たちでくらしをよくすることや、災害や事故から身を守るために何ができるのかを考えさせるということを目的にしていることが明らかである。

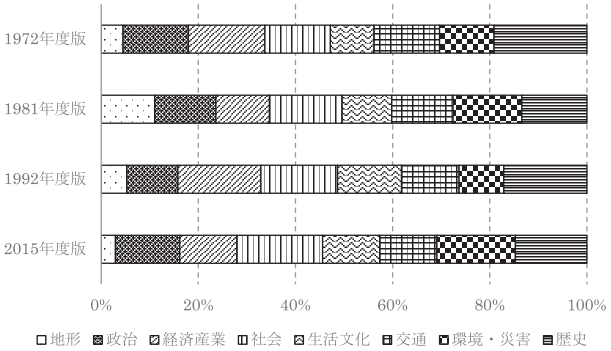


図 6　副読本の内容の項目ごとの推移
（1972 年度版～ 2015 年度版）
（「わたしたちの村　十津川」より作成）

以上のことから、「村のうつりかわり」に関係している歴史の項目の割合が減少し、くらしを豊かにしたり、災害から人々を守ったりすることは、公共機関が関係するため、社会の項目が増えた。また、公共機関の取り組みについて学び、環境への配慮や、災害から身を守るために子どもたち自身ができることは何かについても 2015 年度版では多く取り上げられていたことから、環境・災害の項目も増えたことが考えられる。

また、1992 年度版から 2015 年度版の間には学校統合が行われ、十津川第一小が誕生している。そのため、

1992 年度版と 2015 年度版の間に校区や村に関しての記述内容に変化が見られる。

統合前の 1972 年度版では「一　村のあらまし」という見出しで、村の中心地から川筋ごとにそれぞれの字の特徴がまとめられている。1981 年度版では、1972 年度版とほとんど変化はないが、字の特徴の前に、絵地図や地図記号が掲載されるようになった。そして 1992 年度版では、「二　わたしたちの十津川村」という見出しで校区や村についてまとめられている。校区を絵地図で表す方法の説明や、校区の土地利用や校区にある施設の紹介などが記述された後、村全体について記述がある。村全体については、1972 年度版・1981 年度版と同様に川筋ごとに特徴が記述されている。

一方 2015 年度版では「1．わたしたちのすんでいるところ」という項目にまとめられており、校区を絵地図で表す方法の説明は変わらず記述があるが、その後村全体の土地利用や道路についての記述が加わり、村にある施設の紹介、という流れに変化している。最も大きな変化は、村全体の詳しい紹介を「村内めぐりをしよう」という別の項目にまとめられているところである。1992 年度版のように川筋ごとではなく、北十津川村・中十津川村・東十津川村・南十津川村・西十津川村というように大まかな方角で分けて紹介するかたちに変化した。さらに十津川村全体の地図が載せられ、本文の中で紹介された施設などの位置が地図上で示されるようにもなっている。

このことから、学校統合に伴い、川筋のように細かい区分で十津川村のことについて学習させる形にするのではなく、エリアごとに区分して学習させる形にすることで、十津川村の全体像を捉えやすくしたことがわかる。

次に資料や写真の使用の変化について述べる。

使用された資料・写真の推移について述べる。1972 年度から 2015 年度にかけて六つの資料がまんべんなく扱われるように変化していった。このことから、学習指導要領が改訂されていっても変わらず、地図やその他の資料を活用する力を身に付けさせることが目標の中に定められていたため、資料の掲載を充実することが重視されてきたということが考えられる。（表２）

表２　学習指導要領の中の資料に関する記述

改訂年度	資料の読み取りについての記述
1968 年度改訂（1971 年 4 月施行）	目標 ４　社会生活を正しく理解するための**基礎的資料を活用する能力**や社会事象を観察したりその意味について考える能力をのばし，正しい社会的判断力の基礎を養う。
1977 年度改訂（1980 年 4 月施行）	第３学年　目標 （２）　地域社会における社会的事象を具体的に観察させるとともに，**地図その他の具体的資料を効果的に活用させる。** 第４学年　目標 （３）　地域社会における社会的事象を具体的に観察させるとともに，**具体的資料の特徴を考えながら効果的に活用させる。**
1989 年度改訂（1992 年 4 月施行）	第３学年　目標 （３）　地域における社会的事象を具体的に観察し、**地図その他の具体的資料を効果的に活用することができるようにする**とともに、地域社会の社会的事象の特色を考えるようにする。 第４学年　目標 （３）　地域における社会的事象を具体的に観察し、**地図や各種の資料を効果的に活用できるようにする**とともに、社会的事象の特色や相互の関連などについて考えるようにする。
2008 年 3 月告示	第３・４学年　目標 (3)　地域における社会的事象を観察，調査するとともに，**地図や各種の具体的資料を効果的に活用し**，地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力，調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

大きな特徴としては、どの年度の副読本も写真を重視していることである。1972 年度と 1981 年度の副読本で使用された写真はほとんど同じものであったが、本文の記述に沿った写真を掲載し、児童が学習する際にイメージがしやすいようになっている。1992 年度版からは、ほとんどすべてのページに写真が使われており、2015 年度版では本文とともに掲載されている写真はすべてのページでカラーが使用されるようになった。

また、1992 年度の改訂で、インタビューの内容が本文の中心になったため、作文・インタビューの項目が 1981 年度から 1992 年度にかけて 3 倍以上も増えている。その後の 2015 年度版でもインタビューの内容を中心として取り上げているため 72.2％と、写真の次に多く使用されている。このことは、副読本が説明文を中心とした読み物教材から、教科書準拠型になったことが関係していると考えられる。

以上のことから、資料や写真の使用に関しては、児童が学習していることのイメージを持ちやすいように、写真を使うことと、学習指導要領に沿って、身近な地域の学習の中でも資料の活用ができるように、改訂をかさねるごとに様々な資料をまんべんなく使うことを重視していることがわかる。また、本文が説明文中心から、教科書準拠型の記述に変わっていったことにより、インタビューの資料が大きく増えたことも特徴となっている。

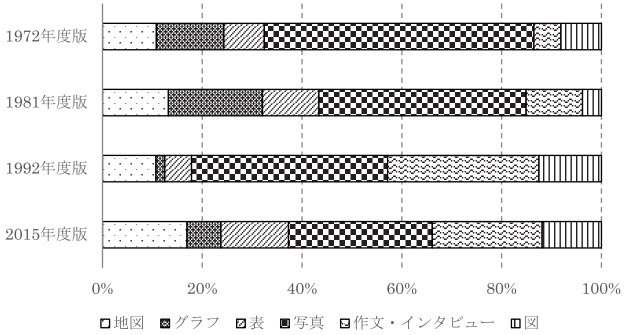


図７　副読本に使用されている資料・写真の推移
（1972 年度版～ 2015 年度版）
（「わたしたちの村　十津川」により作成）

４．おわりに

本稿では、十津川村で使用されてきた小学校社会科の地域学習副読本の中身を分析し、内容や使われている資料の変化を見てきた。ここではその結果を踏まえ、十津川村の地域学習の変遷について考察する。

学習指導要領の改訂に伴って副読本も改訂が行われてきた中で、大きな変化は、説明文を中心とした読み物教材の形から、インタビュー内容の掲載や、子どもたちに自分たちで調べる、やってみることを促す記述の増えた教科書準拠型になったことである。また、内容の変化としては、歴史についての記述が減り、暮らしに関することや環境・災害に関する記述が増えた。

このことから、1972 年度版や 1981 年度版での十津川村での地域学習は、十津川村の実態や村の移り変わりについて学ぶことが中心であり、1992 年度からは十津川村で暮らす人々に注目し、十津川村について学ぶことが中心となっていた。そして現在も使用されている 2015 年度版になると、十津川村で暮らす人々や働く人々に注目するだけでなく、人々の働きを学び、自分たちの行動について考えさせるという形に発展していったということがわかった。

また、学校統合前後でも、副読本の内容の変化が見られた。十津川村全体についての記述が、川筋という細かい部分でとらえさせる形から、エリアごとに区分して村の全体像を捉えさせる形に変わった。これは、校区が広くなったことから、学校のある地域や子どもたちが住む地域について詳しく知るよりも、十津川村全体について大まかにとらえることが重要視されるようになったと考えられる。

今回は十津川村という限定した地域での地域学習の大まかな変遷をみることとなったため、今後の展望としては、奈良県内の他の市町村において使用されている副読本を分析し、地域学習の変遷を見ていきたい。そして十津川村と比較し、十津川村の地域学習には特殊性が見いだせるのかということを明らかにしたい。

謝辞

本稿執筆にあたりご協力いただきました、十津川村教育委員会の方々に深く感謝申し上げます。

参考文献

池俊介（2008），「市町村合併に伴う社会科副読本の課題」. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要，18 号，pp.1-14.

板橋孝幸・岩本廣美・河本大地（2017）：，「へき地小規模校を維持・発展させる沖縄県国頭村の教育システム―持続可能なへき地教育の体系の構築に向けて―」，奈良教育大学紀要，第 66 巻，1 号，pp.53-61.

伊藤裕康（2008），「社会科副読本に関わる実践及び研究の歴史から見た社会科地域学習の現状と課題」．香川大学教育実践総合研究，第 17 巻，pp.1-13.

今奥彌志･鎌倉勝･玉置逸郎･中村明雄･松貫昭代（1992），わたしたちの村十津川 . 十津川村教育委員会.

大藪敏宏（2008），「初等社会科教育における副読本の事例分析と授業の実際－副教材を使った授業実践例とその結果－」. 富山短期大学紀要，第 43 巻，pp.119-132.

鎌倉勝･下野博祥･玉置久代･玉置良孝･中美智枝（1981），わたしたちの村十津川 . 十津川村教育委員会.

小西丈夫編（1972），わたしたちの村十津川 . 十津川村教育委員会.

佐藤たまき（2014），「学校統廃合後の『ふるさと教育』の現状と課題」．地域社会研究，第 7 号，pp96-100.

下野拓也・栗栖章好・稲田学・小川文男・下村倫代・鈴木洋一郎・野尻正人・中西康廣（2015），わたしたちの村十津川．十津川村教育委員会.

筒井由美子（2017），「小学校中学年における地域学習に関する研究―大阪の社会科副読本を中心に―」. 大和大学研究紀要，第 3 巻，pp.109-118.

十津川村ホームページ https://www.vill.totsukawa.lg.jp/（2021 年 3 月 2 日最終閲覧）

十津川村立十津川第一小学校（2020），2020 年度学校要覧．十津川村立十津川第一小学校.

十津川村立十津川第二小学校（2020），令和 2 年度学校要覧．十津川村立十津川第一小学校.

平田博嗣（2007），「よりよい地域理解教育をめざして―東京都区市町村編纂の副読本の分析―」. 東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要，第 43 号，pp.210-226.